

26)

答え c

喉頭癌、声門部癌 T1 症例であると思われます。

a 誤 放射線治療単独での局所制御率は 80～95%で 80%前後ではない。

b 誤 リンパ節転移は稀であるため MRI,CT によるリンパ節転移診断は必須とはいえない
と思われます。(MRI, CT 検査は不要ということはないと思いますが。)

c 正

d 誤 リンパ節転移は稀であるためリンパ節領域への予防照射は不要。

e 誤 治療後の経過観察において肺転移除外など含め、胸部 X 線検査は必要である。

27)

答え b, d

写真より中咽頭癌、T3-4(硬口蓋に浸潤するようにも見えるので T4?)、N2 M0 IVA 症例。

I II 期症例では小線源治療の適応であるが、本症例は外部照射を考慮します。

28)

答え c

a 正

b 正

c 誤 Cs-136 ではなく Cs-137 である。

d 正

e 正

29)

答え c

頭蓋底に接し外科的切除は困難で、病期によらず放射線治療は第一選択である。

化学療法併用による治療成績改善が期待される領域で、化学療法の併用で局所効果の向上
が数多く報告され、シスプラチン、5FU の併用で良好な局所制御と生存率が報告されてい
る。

本症例は T3N2M0 III であり、化学放射線療法が標準的である。

III 期 5 年粗生存率は 50%程である。

- a 誤
- b 誤
- c 正
- d 誤
- e 誤

30)

答え a, e

本症例は 60 歳 女性 非浸潤性乳管癌、断端陰性、リンパ節転移なし、ホルモンレセプター陽性。核異型度については記載なく不明であるが、低リスク群症例としての設問と考えたい。

- a 正
- b 誤 50Gy 以下でも左乳房への照射であり心障害は無視できない。
- c 誤
- d 誤? 閉経後の可能性もあり、アロマターゼ阻害剤投与の可能性も考えられると思われます。
- e 正 上記の如く低リスク群症例としての設問であれば化学療法の適応はなくこれを正答としたい。

(閉経後なのかどうか、核異型度、Her2 スコアなどの記載がなく選択に苦慮する。不適切問題であると考えます。)

以上、解答 26～30 は小川 心一会員（富山大学附属病院）